

れねばならぬこと、さきの調査同様、著者の強調されてゐるのは注意すべきである。たゞ心礎あるによつて比較的平面形の明かとなつた塔址の遺構は、之を薬師寺三重塔と類似の建築に擬せられる。破風拜みの飾金具の如きは、法隆寺金堂のそれと比して餘り小さくない點が、また推定困難な金堂の規模に一つの資料を提供するであらうといふのである。

以上おほまかな本書内容の紹介は却つて讀者に理解の困難を起さしめるであらうが、かゝる心配は實際に本書を繙かるゝことによつて解消するばかりでなく、四十一の挿圖と四十九に上る鮮明なる圖版とは懇切なる本文の叙述と相俟つて此の調査事業の全貌を何人にも手に取る如く教へてゐる。(四六倍判、本文八六頁、昭和十四年三月三十日發行、非賣品(村山修一))

## 彙報

### 喜田文學博士の訃

京都東北兩帝國大學文學部講師文學博士喜田貞吉氏は胃疾を以て去る七月三日夜東京順天堂病院で長逝せられた。博士は徳島縣出身で、第三高等學校を経て明治二十九年東京帝國大學の國史科を卒業せられて後、我が學界に密與せられた大きな業績に就いては、前年還曆の賀を迎へられた際自刊の『六十年の回顧』に詳で

あり、またその一端も本誌上に録されてゐるので、いま改めて記すまでもないが、華甲の壽を受けられて後も不相變各方面への活動をつゞけられた。昭和十年直腸を病んで、一時重態を傳へたが幸に手術後の経過よろしく、健康舊に復して壯者を凌ぐ元氣で、更に東奔西走、昨年は朝鮮に單獨旅行せられ、今年に入つては足立博士の法隆寺に關して新見解を發表するに及び、老體を擧げて論戰を開始して意氣の盛なるを示されつゝ、あつたが、病その間に發し、六月初東北大學の講義を終へて歸京後病臥遂に立たず、多年自ら期された法隆寺論を第一冊とし、以下帝都の研究其他十指に餘る諸研究を集大成する事業の緒に就くに先立つて逝かれた。

六十九の享年は必ずしも常人にとつては短命とは云ひ難いが、常に九十の長命を日にし、古稀に近づき乍ら、あらゆる研究に積極的な態度で臨み、常に第一線に立つことをつとめられた博士の所在は、其の特色ある學風と相俟つて、我が史學界の一偉觀であつた。されば其の長逝は博士自らの遺憾は云ふまでもなく、諸方面から哀惜せらるゝ所で、學界に一脈の寂寞感を與へる次第である。送葬の儀は博士生前の主旨に基いて、東京での告別式を廢し、十三日郷里の阿波國那賀郡立江町柳瀬にて行はれ、梁貞隆法居士と諡して、即日博士生前の設計建設に係る墓域に埋骨せられた。

博士は京都帝國大學文科大學に史學科が創設後間もなく講師を囑託せられて以來三十年、其の間教授に任じて講學、また本會當初よりの會員として、特に評議員に擧げられ、多くの名編を密與して、會の發展を助けられた。されば其の訃報到るや文學部長西

田博士は東京の邸を弔問し、郷里の葬儀に際しては梅原助教授文學部教官並に本會を代表して式に列し、墓前に左の弔詞を供へて、忝しく哀悼の誠を致した。

哀 詞

前京都帝國大學教授、現文學部講師從四位勳四等文學博士喜田貞吉先生、去月下澁、宿病復々發シテ再ビ起ツベカラザルヲ告ク。菅膏ノ潜疾、藥物之ヲ痊損スルコト能ハズ、鍼石之ヲ驅逐スルコト能ハズ、博士ハ資性富達進取ノ氣性、進ンテ斷截ノ效ヲ期セラレシモ其ノ功亦空シク、本月三日下午九時四十五分ヲ以テ東京市ニ長逝セラレ。春秋六十九、嗚呼命ナル哉、嗚呼悲シイ哉。博士ハ明治四十一年京都帝國大學文科大學ニ講師トシテ我が國古代史ニ關スル斬新ノ研究ヲ講述セラレ、大正九年七月ヨリ十三年九月マテ京都帝國大學教授ノ重職ニ任セラレテ國史學第一講座ヲ擔任シ、其ノ後又本文學部ニ講師トナリテ以テ今ニ及ベリ。博士ノ學、其ノ最モ長ズル所ハ我が古代史ニ在リ記録ト遺物遺蹟トヲ巧ニ互參參稽シテ常ニ一家ノ識見ヲ立テ、世ニ問フ所ノ名論大著擧ゲテ算フベカラズ、晩年最モ土俗學ニ潛心シ、我が古代史學界ノ菅宿巨匠トシテ令名海内ニ遍ク、就中法隆寺再建論ノ一道ハ千古不磨ノ大案ヲ提出シ、堂々ノ論陣旌旗槍刀天モ覆ヒ、鞞鼓鯨波地ヲ動カスノ概アリ、蓋シ博士ノ令名ト此ノ卓論トハ我が國史學界ニ於テ永ヘニ濯滅ノ期無カルベシ、今日博士ノ本貫ニ歸葬セラルルニ會シ、德音ヲ追懷シ、遺像ニ焚香シ哀慕ノ情切々ナルモノアリ、冀クハ英魂安ラケク

鳴鑼華藏ノ寶宮ニ鎮マリマシ、長ヘニ三寶四王ノ勝福ヲ享ケラレムコトヲ、聊カ蕪辭ヲ陳ベテ弔悼ノ悃誠ヲ表ス、英靈夫レ來リ嚮ケラレヨ。

昭和十四年七月十三日

京都帝國大學部長 西田直二郎

弔 詞

史學研究會ハ前評議員、會員文學博士喜田貞吉君ノ逝去ヲ悼ミ謹ミテ弔意ヲ表ス

昭和十四年七月十三日

京都史學研究會

(梅原)

### 牧野信之助氏の訃

京都帝國大學文學部講師牧野信之助氏は去る八月以來病臥中であつたが、藥餌效なく遂に去る九月二十五日午前四時自邸に於いて逝去せられた。享年五十六。氏は明治十七年四月二十二日福井縣今立郡國高村に産れ武生中學校卒業後、明治四十一年京都帝國大學文科大學に助手となり、故内田銀藏教授の下に教務に従事したが、翌年志を立て、選科に入り、四十五年修了と共に郷里に歸つて一時師範學校の教鞭をとつたが、大正五年福井縣史編纂員となつて以來相繼いで滋賀縣史、堺市史、北海道史等専ら地方史の編修に従ひよくその業を大成した。昭和八年以來京都帝國大學文學部講師として隔年毎に來講し、今年は「日本拓殖史」の題目の下に國

史專攻學生の爲に特殊講義を分擔せられつゝあつたのであるが、春以來健康勝れず、八月一旦病床につくや遂に再び起たず忽然長逝せられたのは甚に惜みても餘あるところである。思ふに氏の學問の興味は主として中世社會經濟史の領域にあり、殊に地方農村聚落等の問題は最も力を盡されたところであつて、その堅實にして

細緻なる學風は「武家時代社會の研究」(昭和三年)、「土地及び聚落史上の諸問題」(昭和十三年)の二著によつて十分に窺ふことが出来る。然も氏は一面極めて宗教的情操に厚く、夙に「弘法大師傳の研究」(大正十年)を公にし、またその生家の宗派に屬する眞盛上人の徳を讃仰して、その傳記集を編纂せられたこともあつた(昭和二年)。氏の監修になる滋賀縣史堺市史等があまねくその地方の史實を述盡すと共に、よく中央の歴史との關係を説くを忘れず、その内容に於いてはたまたその外形に於いて地方史の白眉と稱せられてゐるのも蓋し理由なきことではない。氏は昨年北海道史の編修を了へて後、更に新に大津市史の編纂を囑託せられ着々その筆を進められてゐたのであつたが、未だその完成を見るに至らずして畢つた。本誌四月號に掲載せられた「湖地問題の一斷片」は岡らすらも氏が公表せられた最後の論攷となつたわけである。

九月二十八日、遺骨の故山に還るに先立ち午後三時三十分富小路二條下願照寺に於いて大學關係者、知友、門弟等相聚り、告別追悼會を營んだ。會するもの百餘名、文學部長、知人總代、學生總代等よりそれ／＼弔辭が述べられた。(柴田)

## 遼慶陵の調査

京都帝國大學文學部の田村講師・小林助手・釣田大學院學生等一行七名は日滿文化協會の委囑を受けて七月二十日神戸出航以來二ヶ月餘、興安西省巴林左翼旗方面の遼代遺蹟を調査した。

七月三十一日奉天出發、八月六日林東着、此處にて遼上京陞の實測を行ひ、十二日林東發、途中モンチョク州・小城子等の各土城を調査しつゝ、十六日白塔子(遼州)に着く。翌日より直ちに土城の實測に着手し、二十三日慶陵の所在地なるワリリマンハに向ふ。此處には興安嶺中の一峰たる慶雲山の中腹に、慶陵即ち遼の聖宗・興宗・道宗三帝の陵墓と認められる三基の墳墓のあることが知られて居り既に盜掘によつて開口、一部の調査も公にせられたが、今回はそのうちで内部に壁畫を遺存する東陵並にその附屬施設について更に詳細な調査を遂行するのが目的であつた。

墓室は磚築にて圓形平面にドームを架した大小六個の室と、それをつなぐアーケードとよりなり、全長七〇尺餘、更にその前方に二〇尺以上に達する磚築無蓋の護道部が設けられてゐることが判明した。室内各壁面には厚く漆喰を塗り、その上に人物畫・山水畫・木造建築細部意匠などを彩色にて畫いてゐる。今回發見せられた護道部においても、同じく人物並に馬の圖を見ることが出来た。陵の前方百間餘を隔てた所に方八〇尺、五間五面の殿堂を中心として廻廊・門等を附し、更に附屬の屋舎を配した遺蹟があるが、その規模もまた今回の調査によつて始めて明らかにせられ

た。

ワーマンハにおける十六日間の天幕生活を経て九月七日再び白塔子に歸り、殘務を果たして九月十日白塔子出發、十二日林西着、更に烏丹城・赤峰西郊土城等の遼金代遺蹟を調査し、義縣奉國寺を見て十九日夜奉天に歸着したのであつた。(小林行雄)

### 國史研究室 記念講演會並特別展觀 創設三十五周年

京都帝國大學國史研究室に於いては、明治四十年同室の創設以來今年に至るまで殆ど三十五年、その間に卒業生の數も年々増して既に三百人に垂んとするに至り、殊にその大多數が地方の諸學校に奉職して國史教育界に自ら一勢力を形造りつゝある有様であるが、豫てそれら地方在住の國史出身者の間に、研究室の隆祥を記念し兼ねて大學延長運動の一助ともなさんが爲に、講演會並に史料展觀を開催せんとする議があつたが、遂に去る七月十日大阪朝日會館に於いてその實現を見るに至つた。

まづ當日の講演は主題を「皇室と日本文化」と題し午後六時より朝日會館公演場に於いて山根徳太郎氏司會の下に行はれた。會衆約千名、場内殆ど立錫の餘地なく、この種學術講演會としては稀に見る盛況であつた。講演の概要は別にパンフレットとして公刊されることとなつてゐるのでそれにゆづり、左にその題目のみを掲げる

- 一、開會の辭 岸本 準二氏
- 一、明治天皇とグラント將軍 吉田 三郎氏

一、皇室と武家政治 魚澄惣五郎氏

一、皇室と古代文化 東伏見邦英氏

一、帝國憲法に見ゆる歴史觀 牧 健二氏

一、日本色々 西田直二郎氏

一、閉會の辭 岸本 準二氏

展觀は同館展覽會場に於いて、同日午前九時より午後五時半まで並に翌日午前中國史研究室が多年蒐集にかゝる史料を専らとし、歴代の宸影宸翰をはじめ、尊攘堂の遺芳、元寇並に吉野朝關係史料、大日本史編纂記録、大津京陸出土品以下各時代文化史料並に對外關係史料を含む總計百點、いづれも來觀者に深い感銘を與へた。

### 史學 研 究 會

例會 六月二十四日(土)午後一時半より文學部第八教室に於いて開催、左の講演があつた。

所謂文化循環説に就いて 高山 岩 男氏

(近く本誌に寄稿せらるゝ管につき概説を省略する)

ギリシア雜觀 村田 敏之亮氏

ギリシアへの旅人はそこにギリシア古典文學の、ギリシア美術の故郷のみを求めて行く。しかしこの古代ギリシアが亡んで以來既に二千年、ヒザンツ文化の下に生き、トルコの治下にあつて、近代國家として再生したのは、十九世紀の初である。私とても古代ギリシアを求めて旅した一人であつたが、この二千年の間を生きて

のびてきた今日のギリシアをそのままに理解したいのが、望となつた。この立場から私の雜觀は展べられる。

しかしギリシアはあの古典ギリシアの故郷、そこには今日も所謂「古典的景観」がある。清澄な空氣と輝き微笑む太陽とが白つばい岩山と紺碧の海と銀緑のオリヅの樹を包む。愛すべく小規模な明晰な世界。そこに古典美術の性情が生れた。しかしマケドニアは景観の上でもギリシア的でない。オリムポスの山はその境だ。ビレウスを含んだアテナイは今も古もギリシアの眼であり、心臓である。そこに古代に擧げて杖を引きし人々をアクロポリスの諸建物、その周圍、其他の遺蹟が充分に満足せしめよう。諸々の方向と高さから、月光に、照明に。しかし彼が住むは最もモダンなアテネ、大學通とスタディオン通に歐洲文明の尖端を享受し得る。この兩極端の中間に大衆ギリシアの生活がある。オモニア廣場、アイオリス通、アテナ通の猥雜騒然とした雑色と雑音との内を行くギリシア人は汚れし服と靴。それは全く近東的だ。テッサロニケでも、クレテの町々でも何とトルコの町々に似てること

か。最一つギリシア人の生活を特色づけるのは、ビザンツ的なものの、ギリシア正教。殊に北方の町々とテッサロニケ。

テッサロニケはこの宗教の外に、更にトルコ的で、更に濕然としてゐる。ここの生活は中世から始まつてゐる。町をはなれて田舎に入れば、北方でも南方でも中部でも温かい純朴な田舎人の心にふれる。それはやや古拙的な疑ふことも欺くことも知らぬ牧人の心であらうか。幸ひギリシアの古蹟はこんな地方にも多くそこに愛憐な自然と朴直な人情とが旅人に時と處とを忘れしめるといふもの。

斯様な諸色を指つのが現代ギリシア。否これ等を包んでメタクサの半獨裁政治がそれ相當のフアツシヨ形態でかため、またかためんとしてゐるのが現代ギリシア王國。牧人の笛と共に勇壯な國歌と行進曲。こんな二千年間の凡てを是認し、肯定し、更に暖かき寛厚の心もて凡てを理解せんとする時、ギリシアの旅は限りなく愉しいであらう。

會報

●委員の異動

委員角田文衛氏は去る七月、日伊交換學生として伊太利に留學されることになつたので、新に考古學教室副手藤岡兼二郎氏が委員に委嘱せられることになつた。

●會員動靜

◇入會

京都帝國大學文學部考古學教室  
 京都市左京區淨土寺南田町二二  
 大阪府三島郡高槻町新京町二九一  
 (右三氏 梅原末治氏紹介)  
 京都市神田區駿河臺二丁目一ノ一 東亞研究所 酒井忠夫氏  
 (右外山掌治氏紹介)  
 京都市左京區岡崎黒谷町 長安院方 島田虔次氏  
 京都市左京區北白川小倉町五〇 白樂莊 眞島行雄氏  
 京都帝國大學寄宿舎 井上肇氏  
 京都市左京區田中春菜町一九 堀田方 青島晃氏  
 京都市上京區紫竹下梅ノ木町一八 柳田陽一氏

京都市左京區田中高原町六三 竹田アベト内

京都市左京區吉田本町三三

大阪市旭區毛馬町七五一

西宮市久保町一三〇

京都市外長岡天神山三二 長岡譚熟内

清水市入江二ノ一三五

兵庫縣武庫郡精道村芦屋山ノ下一三三七

京都市豊島區雄名町四ノ二二三五 橋本方

川崎新三郎氏

◇寄贈交換圖書目錄 (九月現在)

福岡縣史資料 一〇	福岡縣史學會
史學雜誌 五〇ノ七・八・九	日本歷史地理學會
歷史地理 七四ノ一・二・三	社會經濟史學會
社會經濟史學 九ノ三・四・五	立教大史學會
史苑 一二ノ四	東京人類學會
人類學雜誌 五四ノ六・七・八	考古學會
考古學雜誌 二九ノ七・八・九	東北大文科會
文 化 六ノ六・七・八・九	國學院大學
國學院雜誌 四五ノ七・八・九	史迹美術同致會
史迹と美術 一〇ノ七・八・九	社會學徒社
社會學徒 一三ノ七・八・九	國史學會
國史學 三八	

和紙研究 三

和紙研究會

史 學 一七ノ四

三田史學會

無 關 之 三〇・三一

むかしの會

史 淵 二一

九大史學會

臺 大 文 學 四ノ二・三

臺大文學會

國民精神文化 五ノ七・八

國民精神文化研究所

史 攷 一九

早大文學部

西洋史研究 一四

西洋史研究會

中國文學月報 五三・五四

中國文學研究會

蒙 古 四・五・六

善隣協會

歷史學研究 九ノ五・六・七

歷史學研究會

軍事史研究 四ノ四・五

軍事史學會

哲學研究 二四ノ七・八・九

京都哲學會

紀州文化研究 三ノ五・七

紀州文化研究所

宗 學 研 究 一八

宗學研究會

史 學 研 究 一ノ一

廣島史學研究會

基督教史研究 五

基督教史研究會

長 崎 談 叢 二四

長崎史談會

名古屋史談會誌 三ノ三

名古屋史談會

北京近代科學圖書館叢刊 一九・二一・二二・二五

北京近代科學圖書館

Harvard Journal of Asiatic Studies 4-2

Harvard-Yenching Institute.